

医師は語る



医療法人社団健翔会
堀口医院 理事長
堀口 裕

もし癌になったら はじめに何をすべきか

もし癌になったら、まず落ち着いて下さい。とても長い時間、例えば10年、20年、あるいは30年かけてできた病気です。で、何かを急いでやってみても癌は消えません。また反対に、それ以上すぐに悪化もしません。まず、落ち着いて治療方針をたてるのが大切です。具体的な治療に入る前に、何故癌になったのかを理解して下さい。当たり前のことですが、癌は自分でできたものではないです。時々自分の家系は癌の血筋だから、それで自分も癌になったと言う患者さんがいます。確かに間違っているとは言えません。しかし、もしそんな血筋があったとしても、癌が起る大半の原因は自分の日常生活の中に存在します。何故なら、もし血筋が癌の原因なら時をかせずして、生まれたとき既に癌になっていてもおかしくありません。でもほぼすべての人は、生まれたとき、どこにも癌はありません。ところで癌というものは、残念ながら目にも見え、自覚症状も全く無いままに、とても長い時間をかけながら確実に成長してきたのです。では何故癌になったのでしょうか。それはとても簡単なことです。自分の身体の中が癌になるような弱々しい状態に、ずくとなってい

たからです。一時的ではなく、それこそとても長い時間、その状態だったのです。たったそれだけです。ある人は、こう言うかもしれません。「いや、そんな簡単なはずはないだろう！だって癌だよ、癌！」癌の遺伝子だから何だか、そんなのがあるだろう。ここでアドバイスをさせて下さい。もし癌を治したいなら、簡単に考えることです。書物やインターネットなどで、慌ててにわか勉強をして、頭に詰め込んではいけません。20年余り診察していますが、重篤な癌になったから、それを勉強で克服したという話は聞いたことがありません。それよりも診てもらっている病院の先生に、すぐに抗がん剤をしないと言われたが、それを頑なに拒否していたら、「もう、うちの病院に来なくていい」と言われ、それに発奮して「意地でも治してやる」と頑張っているうちに、本当に癌が消えたという話の方が多いです。決して、主治医の先生と喧嘩をしないという意味ではありません。いろいろな表現の仕方がありますが、癌を治すには「なにくそ！」という気持ちが必要です。時にこんなアドバイスを送る方がおられます。「日々笑って、気持ちを穏やかに、こころ躍らせながら、体はリラックス、そして自然のままに、時の流れに身を任せて過ごす」。それはとても美しくもあり、理想的な治療の姿です。しかし重篤な癌であればあるほど、それは延命的な措置に過ぎません。ここは闘争心をむき出しにして闘うべきなのです。不安な気持ちがいっぱいで、押しつぶされそうになっても、泣きながら闘っていく気持ちが必要になります。そんな中に必ず勝機が見えてきます。残念ながら気楽に治す道はないと思うって下さい。(次頁に続く)

もし癌になったら

治療はどうするべきか

もし癌といわれたら、まずどこまで広がっているかを確認して下さい。大腸癌であれば、大腸の中にどのくらいの大きさになっているのか、周囲に飛び出しているかどうか、リンパ節に転移しているかどうか、他の臓器にも転移しているかなどを確認して下さい。その結果、ご飯が通らなくなっているのなら、ご飯が食べられるように処置しなければなりません。癌と闘うためには、体力が必要です。霞を食べて生き抜くことはできません。手術になるか、場合によっては抗がん剤のたぐいになるかは、その時の状況次第になります。もちろん何もなしという選択肢もあります。しかし、もし癌を乗り越えたいという気持ちがあるなら、これは勝機を見出すための処置と考えるべきです。検査の結果、ご飯の通り道があって通過障害が起っていないなら、これは誠に有り難いことです。また癌がその場だけにどまっておき、他の場所へ飛び火していないのなら、まず手術を受けるべきです。その方が治しやすいのです。癌を残したままの姿はたとえて言えば、頭の上に大きな漬物石を載せて、「さあ！夫高くジャンプしてごらん。」といわれているようなものです。そんな重い漬物石を載せたまま、ジャンプなどできません。漬物石を取り除くべきです。もちろん、そんな手術などしたくないから受けたくないという選択肢もあります。しかしこの方法は大きな勝機です。次に、もし手術ができないので抗がん剤のたぐいになると言われたら、体力と相談して下さい。もともと体力がないから癌になったのですが、残っている体力と相談して、たとえば自力でご飯が食べられて、自力で身のまわりことができ

るなら、その状態を維持できるような抗がん剤のたぐいを使って構いません。しかしそうでないなら、直ぐに使わずに、何らかの方法で体力の回復を図ってから、再検討して下さい。でも体力の回復を図れたなら、わざわざ手術や抗がん剤治療を行わなくても、そのまま治るのではないかと？という疑問が残ります。その通りです。体力の回復ができたら、きっと癌は治るでしょう。ただしそこには条件があります。癌が消えるまで、体力の回復に専念できるという条件です。癌の塊があるということへのストレス、不安、恐怖に、途中で押しつぶされてはいけません。あるいは仕事や行事が忙しくて、努力が続かないなどということがあるではありません。

もし癌になったら

治癒を目指すべきである

もし癌になったら、完全に治ることを考えて下さい。このまま共存していけば、それでいいという考えはいけません。中学校でも高校でも、学校に通っていた頃はテストがあつて、いつもいいやな思いをしていました。それでも自分の好きな科目があつた、100点をとりたいたいと思って勉強しても90点が精一杯ということが多かったです。満点はそう簡単ではありません。つまり癌の場合も完全に治したいと思って努力しても、共存で落ち着くことが多いのです。もし最初から共存でいいわ、などと思って努力しても、癌がさらに進行するという結果になります。癌の治療において最も大切なことは、患者本人の力を引き出すことです。そのつなぎとして手術や抗がん剤や放射線治療があります。すなわち本人の力を引き出すための時間をつくるわけです。また先に述べたように、癌の塊があるという精神的

ストレスは、自分の力を引き出すときの邪魔になります。そのために癌の三大治療が必要な場合もあります。さて、癌は自分で治さなければなりません。残念ですが、たとえ家族の者であっても、身代わりになることはできません。自分で癌を治すとき必要とする力のことを「自己防御力」と言います。しかしここでいう力とは、癌になった時のための、とっておきの、特別な力のことではありません。もともとそんな力は存在しません。自己防御力とは、癌を含めて病気を防ぐための自分の力のことです。この力を十分に持っているうちは、癌にはなりません。この力を失ってしまったから癌になったのです。この力を高め続けられるなら、そして常に目標値を超えていけるなら、きっと癌を治すことができます。癌治療に使われる抗がん剤や放射線は、しばしばこの自己防御力を悪化させます。そのために癌が消えたようにみえて、何度でも再発転移を繰り返すのです。そこで抗がん剤や放射線の治療効果を残し、しかし自己防御力を高め続けるために「還元電子治療」がつけられたのです。抗がん剤や放射線の治療効果を支える下地治療として還元電子治療は必須なのです。

【堀口裕先生プロフィール】

北海道出身。川崎医科大学医学部卒業。一九九二年香川県坂出市で医療法人社団健翔会 堀口医院を開院。現在堀口医院理事長兼院長を務める。世界で初めて細胞の中を調べる「細胞内検査」を独自に考案され、世界各国で特許を取得。またその細胞のコンディションを取り戻すための「還元電子治療」を独自に開発。二〇一一年五月、世界中医薬学会連合会、自然療法研究専門委員会、副会長に就任。現在は、病気の根を調べる「自己防御力診断」と病気の根を治療する「還元電子治療」を駆使し、全国で一万六千人以上の患者の治療に取り組む傍ら、「根元の医療」と呼ばれる新しい医療を推進し、全国で講演活動を行っている。

